

世界農業遺産国際スタディ・プログラム 研修レポート

総論

大学進学を機に石川で一人暮らしを始めた私は、自分が部外者のような意識を当初感じていました。自由な生活の中で、似ているようで違う地元富山を思い出すことも多々あり、ただ流されてここにいる気がして、楽しさよりも退屈さや窮屈さを感じる機会のほうが多かったです。そんな折、昨年1月1日に能登半島地震、9月には歴史的豪雨が、能登を襲いました。震災前に能登に訪れた経験がなかった私は、少しでも被災地の力になりたいと思い、輪島でのボランティア活動に参加しました。倒壊した家屋や、沖に打ち上げられた流木を目の当たりにし、途方もない絶望感に襲われましたが、夕日に照らされ輝く海を一日の最後に見た時、私は被害の凄惨さを一瞬忘れてしまうほど感動しました。本来の能登はこのように人々の心を動かしてきたのだらうと感じたことが、強く印象に残っています。

今回のプログラムでは、能登を世界農業遺産という視点から考えましたが、プログラムを通して出会った人たちとは、能登の世界農業遺産に関連する生業等に対するそれぞれの思いや考えを率直に語り合うことができました。年齢も立場も異なる人たちとの対話は、単なる情報のやりとりではなく、お互いの背景や価値観に触れる貴重な機会となりました。能登という一つの地域を見つめながらも、見えてくる景色や課題の捉え方が人それぞれ違っていることに気づき、自分の中の「地域との関わり方」に対する考えも少しずつ揺らぎ、広がっていくのを感じました。

特に印象に残っているのは、震災、そして昨年9月の豪雨を乗り越え、能登という土地で自身の田を、石川のお米を守る農家の方の姿です。その方の言葉や姿勢からは強い決意と、この土地への深い愛情がにじんでいました。被災地としての能登を見るだけではわからなかった、営みの継続が持つ意味や、農業という行為そのものが、地域との結びつきを支え、未来へつなぐ営みであるということ、あらためて教えられた気がします。

そして、能登に関して学びを得ると同時に、能登の担い手不足の深刻さにも気づかされました。震災による被害が大きかった地域では、元々少なかった若い世代の農業従事者や地域の担い手がさらに減少し、これからどうやって復興と日常の営みを両立させていくのかという課題が、日々の暮らしの中に重くのしかかっています。その一方で、新しい形を模索しながら、地域の魅力を伝える取り組みを行っている若手の農家や移住者の存在、観光や教育と地域の魅力をつなげようとする地域おこし協力隊の方々の取り組みなど、能登という土地で生きること、前向きなエネルギーも確かに存在しています。生産者のみならず、地域全体で、能登を対外的にPRする姿勢は、能登の里山里海の持続可能な存続につながると思います。

また、私は今回のプログラムで能登だけでなくイタリアの世界農業遺産にも訪れました。イタリアでの学びは、能登の課題を「地域固有の問題」としてではなく、グローバルな視点で考えるヒントにもなりました。イタリアでは様々な体験し、欧州の有機農法に対する考え

方を学ぶことができました。この考え方は能登で行われている、自然環境や伝統的な知恵を活かした農業にも通ずると感じ、能登の農作物をブランド化するにあたり応用できると思われま

す。このように、能登とイタリアという二つの世界農業遺産を通して得た経験は、私の中で一つに重なり合いながら、地域に根ざすことの意味や、農業が持つ社会的・文化的価値について、より深く考えるきっかけとなりました。また、今回のプログラムを経て、石川という場所、そして能登で出会った人々や風景が、確かに自分の心の中に根を張りはじめています。震災を経てなお続く営みの力強さに触れたことで、私はこの土地に対して、以前よりもずっと深く、温かな関心を持てるようになりました。そして、この関心を一過性のものにせず、これからの学びや行動にどうつなげていくかが、私に課された次の問いだと感じています。